氏　名（本籍地）	沓澤　岳（千葉県）
学　位　の　種　類	博士（社会心理学）
報告・学位記番号	甲第 483 号（甲（心）第七号）
学位記授与の日付	2021 年 3 月 25 日
学位記授与の要件	本学学位規程第 3 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	トレーニングによるセルフコントロールの向上 ―実行機能に焦点を当てた検討―
論 文 審 査 委 員	主査　准教授　博士（社会心理学）　尾崎　由佳
	副査　教授　大島 尚
	副査　客員教授　堀毛 一也
	副査　筑波大学准教授　博士（心理学）　外山　美樹

東洋大学大学院

学位論文審査結果報告書〔甲〕

【論文審査】

沓澤氏の博士学位論文は、セルフコントロール向上をめざす介入法として、実行機能トレーニングに注目し、効果検証のための実証研究を行うとともに、関連する心理的基盤について議論したものである。

序論部分において、自己制御に関する広範な研究文脈の中にセルフコントロール研究がどのように位置づけられるのかを明確に述べている点などから、研究テーマに関する俯瞰的な理解ができていることが読み取れる。また、基盤となる心理プロセスとして Hofmann & Kotabe(2012)の PI モデルをあげて詳述していること、その過程に関与する実行機能についても適切な説明を加えていること、さらにこれらの先行的知見にベースを置きながら独自のモデルを導き出していることなど、中心的テーマに焦点をしぼった議論を深化できているという点において、高度な専門性が示されている。ただし、論文審査過程においては、背景となる研究史や関連する先行的理論についての議論をもっと厚くしていくことが望ましいという指摘があり、加筆修正による対応が加えられた。

実証研究としては、研究１～４の心理実験の成果が報告された。研究１においては、先行研究の手続きを踏襲して再現を試みた条件に加えて、新たなトレーニング法の考案および検討を行っている。この研究１の結果および関連する先行研究に関するていねいな整理を通じて、「抑制の反復」が含まれることが決定的要因であると考察した。この要因の効果についてより精緻な検討を行うために研究２が実施された。剰余変数を厳密に統制した上で条件間の比較を行い決定的な要因を洗い出すという研究の進め方は、実験心理学の基本的な姿勢を徹底しているという点で高く評価できる。研究３および研究４においては、本論文の提唱するモデルに基づいて「葛藤フェーズ」に関わるトレーニングに大きく焦点をあてた検討が行われた。これらの成果から、既存の知見を整理するのみならず、さらに発展的な手法によって介入効果を明らかにしたと言う点において、有用性の高い知見が得られている。また、研究１～４を通じて、事前セッションと 13 日間のフォローアップおよび事後の効果測定までを含む、多大な手間と時間のかかる実験手続きを用いたにもかかわらず、細部にまで気を配りながら完遂したという点についても大いに評価できる。しかし同時に、サンプルサイズが小さいという限界点については、今後の課題として残されていることも述べられた。論文審査過程においては、統計的分析および報告のしかたについて修正が必要な箇所が指摘され、加筆修正によって適切な対応が加えられた。

総合考察においては、各研究の成果をふりかえりつつ、セルフコントロールおよび実行機能に関する研究文脈に対してどのような貢献ができたかが議論された。未だ検証を重ねるべき点も残されているものの、人々のセルフコントロールを促進する方法に関して新たな知見を加えたという点で社会的意義のある取り組みであると評価できる。口述試験および公聴会においては、実行機能に関して３因子を想定したモデルではなく、共通因子を想定した新モデルからも解釈可能ではないかという指摘がなされた。これに関して沓澤氏は、本論文の成果に基づいて議論できる範囲と、今後の検証が必要となる範囲を明確にしつつ、科学的姿勢を持って適切な回答を行った。

【審査結果】

本論文の研究１は、査読のある学術誌「実験社会心理学研究」に沓澤氏を第一著者として掲載されたものである。また、研究１～４は国内学会（日本心理学会年次大会）および国際学会（Annual Convention of Society for Personality and Social Psychology）において発表された。本論文については、不正判定ソフトにより、盗用等の不正行為がないことを確認済みである。また、社会学研究科（社会心理学専攻）の博士学位審査基準に照らしても妥当な研究内容であると認められる。

本審査委員会は、沓澤氏の博士学位請求論文について、所定の試験結果と上述の論文審査結果に基づき、全員一致をもって本学博士学位を授与するに相応しいものと判断した。